

II. 研究方法

(1) 実習概要

実習校：山梨県内公立中学校

実習期間：5月28日～12月24日

(2) 対象者

対象者：中学校3年生

球技サッカー選択者

男子：14人 女子：16人 合計：30人

(3) 授業実践

単元：E球技ゴール型「サッカー」

単元指導：11月5日～12月22日（16回）

実践授業：11月16日・12月8日（2回）

※実践学習は、対話的授業を重視した授業

- ・単元及び指導について

初め5回の授業では、サッカーの意義や歴史や基本的な個人技能、サッカーのポジションを身に付け、なか7回の授業では集団的技能の習得やミニゲームの動画分析に取り組んだ、終わり4回の授業では、これまでの学習内容を生かし、リーグ戦を行った。授業を指導するに当たって、思考的な授業展開を目的としたため、積極的に発問や問いかけを行い、答えや考え方を教員が提示し、教え込みの指導にならないような指導を行う。重ねて、研究目的にある、ICT機器の活用やグループ活動を通じた意見交換・共有を積極的に取り入れ、対話的な授業実践を重視した授業を展開した。

- ・単元の目標

① 知識及び技能

次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームを展開すること。

ア ゴール型では、安定したボール操作と空間を作り出すなどの動きによってゴール前への侵入などから攻防すること。

② 思考力・判断力・表現力

攻防など自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。

③ 学びに向かう力、人間性

球技に自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、作戦などについての話し合いに貢献しようとする、一人一人の違いに応じたプレイなどを大切にしようとする、互いに助け合い教え合おうとすることなどや、健康・安全を確保すること。

表1. 単元の計画

展開	学習内容
はじめ (5回)	1. オリエンテーション ・サッカーの意義や歴史 ・学習の仕方の確認 ・学習カード、学習の約束 ・事前アンケート調査 2～4. 基本技能 ・キック（トラッピング） パス・ドリブルなど ・ミニゲーム（4回目撮影） アウトナンバーでのゲーム 5. サッカーのポジション・役割 動画分析・グループ活動 ・サッカーのポジション及び ・4回目に撮影した動画を分析し グループ内で話し合いを行う
なか (7回)	6. 反省した課題に取り組む ・グループで話し合った内容について、反省し実践を行う 7～11. 集団的技能 ・壁パス ・スルーパス ・空いている空間に走る ・様々な動きからのゴール 12. 研究授業 ・ミニゲームの撮影 アウトナンバー（4対4） ・撮影した動画を分析し グループ内で話し合いを行う
終わり (4回)	13～16. リーグ戦・まとめ ・学習内容を生かしたゲーム ・単元「サッカー」の反省 ・事後のアンケート調査

・実践学習について

① 授業日：12月8日（12回目）

9：50～10：40

② 使用道具

サッカーボール，ゴール，ビブスマーカー，iPad，ワークシート等

③ 本時の目標・学習評価

自己や仲間の技術的な課題やチームの作戦・戦術についての課題や課題解決に有効な練習方法の選択について，自己の考えを伝えること．学習目標：「オフ・ザ・ボールの人がどのように動くか考えよう（得点場面）」．

IV. 授業の流れ

表2. 研究授業の流れ

展開	学習内容
導入 (5)	✓準備運動・補強運動 ✓本時の学習目標について確認する 学習目標：オフ・ザ・ボールの人がどのように動くべきか考えよう ✓本時の授業内容について説明する
展開 (40)	✓1対1の対面パスを行う ✓4対4のミニゲームを行う ✓グループごとに動作分析を行う →動画分析と同時に言語活動を行う
終末 (5)	✓グループごとの意見共有 ✓整理運動

V. 4対4のミニゲームについて

○グループ分け

実習校の指導教官と事前に振り分けた男女混合の4人又は5人のグループを7つ(A~G)作った．サッカーにおける技能の程度に配慮して振り分けを行った．

○試合のルール

i. 得点

通常のゴールイン1点に加えて，今回の学習目標である，「オフ・ザ・ボール」の動きを意識させるために，コート内で味方のパスを受けることで得点につながるパスエリアを作り，パスエリアで味方からのパスを受けることで2点入る．このパスを受けてさらにゴールインし

た場合には，3点となる．明らかにパスをそらした場合には，得点と認めない．

ii. 試合時間

1試合4分間（4分間を4回行う）

iii. その他のルール

試合開始・得点後はコート中心から始める．コート内からタッチライン・ゴールラインを越えてボールが出た場合には，キックインで試合を進行する．ゴールキーパー無し．味方パスエリア（ゴール前）でのディフェンス禁止．遠距離でのシュート禁止．

表3. リーグ表

試合数	A・B・C グループ	D・E・F・G グループ
1試合目	A 対 B 審判・撮影 C	D 対 E 審判・撮影 F 作戦会議 G
2試合目	A 対 C 審判・撮影 B	F 対 G 審判・撮影 D 動画分析 E
3試合目	B 対 C 審判・撮影 A	勝 対 勝 審判・撮影 動画分析 負
4試合目	全グループ 動画分析	負 対 負 審判・撮影 動画分析 勝

※D・E・F・Gのグループの3・4試合目は，筆者が各グループの役割が均等になるように指示を出す．

○リーグ戦の役割分担

i. 試合をするグループ×2チーム

ii. 審判・動画撮影×1チーム

審判は両サイドのタッチラインを縦に移動し，コート外に出たボールの所有権がどちらか判定したり，得点をカウントしたりする．また，動画撮影は，グループごとに割り振ったiPadを使用し，ゴール裏から1試合を撮影する．

iii. 作戦会議・動画分析×1チーム

1番始めの試合に関しては，観察するための動画撮影ができていないため，チーム方針や作戦などについてグループで話し合う．また，動画分析は，朝礼台周辺で行い，今回の課題である，得点場面における，オフ・ザ・ボールの人がどのように動いているのか分析を行う．

Ⅲ. 結果及び考察

(1) アンケート結果

アンケートでは、動画分析や話し合い活動を通じて学習を深めることができていたのかを回答させた。

Q1 動画分析や話し合い活動を通じて見つけた課題を実践で生かすことはできましたか？

はい	89%
いいえ	11%

動画分析や話し合い活動を通じて、生徒は、課題を発見し、課題に取り組むことができたという回答をしていた。

Q2 動画分析や話し合い活動を通じて実践できたことや、挑戦したことについて詳しく教えてください。

回答について、大きな項目で分けると「作戦会議やポジショニングの確認」、「自他の動作分析・確認」、「反省した内容が改善した」の3つに分類することができた。特に回答が多かったものは、動画分析を通じて自分の動きについて客観的に確認することができたということが示されていた。

以上の内容から、動画分析や言語活動を通じて、課題を見つけ改善できていると感じた生徒が多く、自分の動きについて改善ができるようになっていっていると感じている。特に課題であった、オフ・ザ・ボールの際にどこの空間が空いているのか、ゴールに繋ぎ、ゴールインすることができるのかを考えている記載が多い傾向があった。ゆえに、得点するためには、オフ・ザ・ボールの人がこのような動きをすることという、概念化や自分の言葉で表現することができるようになったと推察される。

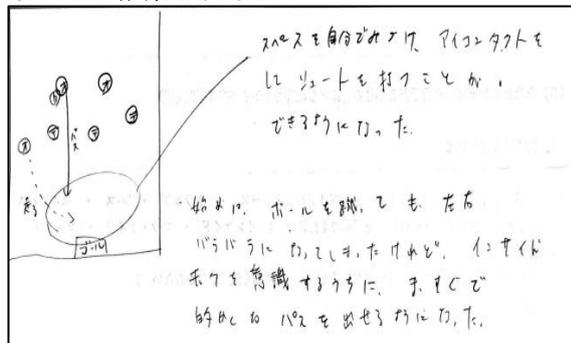


図5. 抽出Aさんアンケート回答

(2) 学習カード

2. 動画を見て分析してみよう

攻

守

問1 (何処かの場所にはいるだろうか。)

② 味方からのパスが来たときにゴールにボールを入りやすいと思えばから。

④ ゴール近くでボールを奪い取りながら。

問2 (次の攻撃をするためのこの位置にはいるべきか？)

ゴールの近くでボールを奪い取りながら。

問3 (次の攻撃をするためのこの位置にはいるべきか？)

ゴールの近くでボールを奪い取りながら。

図6. 抽出Bさん学習カード (第5回)

2. 動画を見て分析してみよう

攻

守

問1 (何処かの位置にはいるか。)

攻・ゴールを通りやすい位置、パスが通りやすい位置かと思われ。

守・ゴールを奪い取り、ゴールの近くでボールを奪い取りながら、その位置
にいることで、ゴールできるような状況を作ることができると思われる。

問2 (次の攻撃をするためのこの位置にはいるべきか？)

ゴールの近く

問3 (次の攻撃をするためのこの位置にはいるべきか？)

ゴールの近く

図7. 抽出Cさんの学習カード (第5回)

以上の内容から、動画分析や言語活動について回数を重ねることで、考えるための視点や知識が身に付き、生徒自身の言葉で表現ができるようになったと考えられる。第12回学習カードの内容から、理解しやすいような図式化ができるようになったこと、今までの自分自身との比較・分析ができるようになったこと、次の動きが予想できるようになったこと、どのようにしたら得点に結びつくのかなど、生徒が自分の考え方を形成することができるようになったことが推察される。また、今回の課題であるオフ・ザ・ボールの人の動きについて、これ以降の学習カードでどうしたら得点に結びつくかの記載が見受けられ、長期的に課題に取り組むことができるようになった可能性が考えられる。

(3) 発問や問いかけによる指導 (抽出事例)



図10. 抽出Dさん (第5回目授業)

Dさんは、積極的に動きボールに対して積極的に向かっていくプレイスタイルであるが、パスを出した後に、得点するための位置に動くことができていなかった。また、ドリブルの際にボールへ意識が行き過ぎてしまい、パスを出すべきではないところに蹴ってしまったり、ゴールとは全く異なる場所にキックをしたりしている様子が見受けられた。



図11. 抽出Dさん (第12回目授業)

Dさんは、授業外や学習カードなどで技能や連携などについて質問を行う機会が多くあった。特にボールに視線が行き過ぎてしまい、周囲の様子や状況を把握・判断することができていなかったため、得点するためには、どこに移動したらいいのか考えることやその移動したり周囲の状況を判断するためには、どこの場所を見たり、どのようなことを意識したりすればよいのか考えてみようという発問や問いかけを行った。改善が見られた場面として、図11の場面では、チャンスボールが来たときに真っ先にボールへ走りこみ、シュートを決めた場面である。ボールだけでなく周囲の生徒の様子や得点するためにどこに動くか判断する力が付いたと考えられる。さらに、アンケートや学習カードにおいて、サッカーの技能向上を感じていたり、質問内容について自らの考えを示したりすることができるようになったと推察される。



図12. 抽出Eさん (第5回目授業)

Eさんは、基本的に右又は左サイドにすることが多い様子であり、ゴール前に多少動くことはあったがボールを受けようとはしなかった。また、パスを受けてもすぐにセンターの生徒にボールを戻し、ゴールを狙える位置にいても、自ら積極的にゴールを狙うことができていなかった様子が見受けられた。



図13. 抽出Eさん (第12回目授業)

Eさんからは、授業内外の時間で、私は試合中どこに移動するべきか分かりませんという質問を受けた。実際に図12のように立ち止まってしまうことが多い様子が続いていたため、試合中に相手や仲間がどのような動きをしているのか観察したり、得点を奪うためにチャンスの場面で自分が何をすべきか考えさせたりしていると少しずつ、自ら積極的にシュートを蹴る機会が増えてきた。図13は、仲間からのパスを受け、キックでゴールインを決めた場面である。Eさん自身、アンケートや学習カードで自らの技能向上や得点をするための方法について、自分の考えを持ち記入できるようになったことが推察される。

IV. まとめ

今回の研究では、アンケート結果から、作戦会議やポジショニングの確認、「自他の動作分析」、「反省した内容が改善した」の3つについて変容があったことを示した。学習カードでは、「生徒自らの言葉で表現」、「自分の考えを形成すること」について、言葉による説明が向上した。発問や問いかけによる指導では、生徒が疑問に思っている課題について、解決に向けての発問や問いかけを行う事で、「より良い動きへと変化する」、「自分の考えを持ち行動ができるようになった」と自ら気づき改善ができるようになった。以上3つの内容から、知識及び技能を概念化する、自分の考えを形成する、新たなものを創り上げることには、主体的・対話的で深い学びが必要不可欠であると考えられる。

V. 成果と課題

(1) 成果

今回の実践を通じて、保健体育における主体的・対話的で深い学びを意識した授業を経験できたことは私にとって、大きな学びとなった。個人的に一方的な教え込みの授業をすることよりも、生徒に主体性を持たせた授業を目指しているため、そのための指導の工夫や配慮が困難であることが理解できた。また、通常の授業回数であれば、8又は12回の授業回数になるはずであったが、実習校との兼ね合いで16回の授業を指導することができ、全てやりきるこ

とができたことは大きな自信となった。重ねて、自他の動きを視覚的に観察させることの重要性を痛感した。今回の研究結果において、動画で自他の動きを観察することに対して肯定的な回答や発言などが多く示されたため、現場で指導する際には、積極的にICT機器の活用をしたいと思った。

(2) 課題

今回私が授業実践を行って感じた課題は2つあり、1つ目は、提示した課題について常に生徒が認識できるようにしておくことだ。適切に課題を提示しておかないと、何のために動画を見ているのか、何のために話し合いをしているのか軸がぶれてしまうことが予想されるため、常に声掛けをしたり、視覚的に理解できるような配慮をしたりする必要がある。2つ目は、予想される生徒の反応をきちんと想定しておくことだ。課題解決の授業を行う際に生徒からの反応を予想しきれいいなかったため、上手く授業を展開することができなかった。限界はあるが、ある程度は想定をして授業を行う事ができるようにしたいと感じた。

VI. 参考・引用文献

- ・中央教育審議会(2016) 主体的・対話的で深い学びとは
- ・独立行政教法人職支援機構(2017) 主体的・対話的で深い学びの実現
- ・文部科学省(2017) 『中学校学習指導要領解説保健体育編』
- ・加藤尚大(2018) 体育授業における言語活動の質を高める指導の工夫—マット運動(3年生)の授業実践から—
- ・黒岩一雄,大矢隆二,木宮敬信,柳瀬慶子,小島喬登(2019) 小学校体育におけるICT活用の普及に向けて—ICT活用の授業実践を通して—
- ・渡辺良勝・鈴木直人(2011) 言語活動の充実に関する研究 — 小中の接続を意識して —

謝辞

本年度はコロナウイルス感染症が流行した中でしたが、本研究にご協力いただいた連携協力校の生徒のみなさん、校長先生、指導教官の先生をはじめとする全ての先生方に感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。